

十助と三権

岡本綺堂

青空文庫

登場人物

駕籠かき かご
権三 ごんざ

権三の女房 おかん

駕籠かき 助十 すけじふ

助十の弟 助八

家主 六郎兵衛

小間物屋 彦兵衛

彦兵衛のせがれ 彦三郎

左官屋 勘太郎

猿まはし 與助

願人坊主 ぐわんにんぼうず
雲哲 うんでつ

おなじく 願哲

石子伴作 いしこばんさく

ほかに長屋の男 女 娘 子供 捕方

駕籠舁など

第一幕

享保時代。大岡越前守が江戸の町奉行たりし頃。七月初旬の午後。

神田橋本町の裏長屋。壁一重を境にして、上のかたには駕籠かき權三、下の方は駕籠かき助十が住んでゐる。いづれも破れ障子のあばら屋にて、權三の家の臺所は奥にあり。助十の家の臺所は下のかたにある。權三の家の土間には一挺の辻駕籠が置いてある。二軒の下のかたに柳が一本立つてゐて、その奥に路地の入口があると知るべし。

(けふは長屋の井戸がへにて、相長屋の願人坊主、雲哲、願哲の二人も手傳ひに出てゐる體にて、いづれも權三の家の縁に腰をかけて汗をふいてゐる。助十の弟助八は廿歳前後のわか者、刺青のある男にて片肌をぬぎ、鉢巻、尻からげの跣足にて濫團扇を持って立つてゐる。權三の女房おかん、河岸の女郎あがりにて廿六七歳、これ

も手拭にて頭をつゝみ、襷たすきがけにて浴衣ゆかたの棲つまをからげ、三人に茶を出してゐる。少しく離れて、猿まはし與助は手拭を頸にまき、浴衣の上に猿を背負ひ、おなじく尻からげの跣足にてぼんやりと立つてゐる。表には角兵衛獅子の太鼓の音きこゆ。)

雲哲 やれ、やれ、暑いことだぞ。

願哲 まさか笠をかぶつて井戸がへにも出られず、この素頭すあたまをじり／＼と照りつけられては、眼がくらみさうになる。

雲哲 まつたく今日の井戸がへは焦熱せうねつ地獄だ。

おかん お前さん達もあたしのやうに手拭でつつんでゐれば好いぢやありませんか。

願哲 かういふ時には女は格別、男は鉢巻でないと何どうも威勢がよくないからな。

助八 はゝ、笑はせるぜ。鉢巻をしたつて、すつとこ被かぶりをしたつて、願人坊主の相場がどう上るものか。

おかん 與助さん。おまへさんもお飲みでないかえ。(茶碗を出す。)

與助 (進みよりて丁寧ていねいに會釋する。)はい、はい。いや、これはありがたい。實はさつきから喉のどが渴かわいてひり／＼してゐました。

助八 いくらおめえの商賣でも、長屋の井戸がへにえて公を背負しよつて出ることもあるめえ

ぢやあねえか。

與助 それがね。(猿をみかへる。)なにしろ這奴こいつがよく馴染なじんでゐるのでね。ちつとの間でもわたしの傍を離れないのですよ。

おかん 畜生でも可愛いもんだねえ。

與助 可愛いもんですよ。

助八 ぢやあ、おれも可愛がつて遣やらうか。(猿のあたまを撫でる。)やい、えて公。手前も一緒に出て來ながら、親方の背中で高見の見物をきめてゐる奴があるものか。人並はづれて長え手を持つてゐるんぢやあねえか。みんなと一緒に綱をひいて、威勢好くエンヤラサアと遣つてくれ。おい、判つたか、判つたか。(猿の耳を引張れば、猿は引つかく。)え、え、痛いてえ、痛いてえ。こん畜生、だしぬけに引つ搔かきやあがつたな。

おかん おまへさんが惡いたづら戲わらをするから悪いんだよ。

與助 こいつは何うも氣あが暴あくつていけません。八さん。まあ堪忍して遣つてください。

助八 痛いてえ、痛いてえ。(手の甲を撫でながら。)氣あが暴あれえにも何にも、まったく其奴は旅の山猿だ。江戸前の猿ぢやあねえ。

おかん 猿に江戸前も旅もあるものかね。うなぎと間違へてゐるんだよ。(笑ふ。)

雲哲 山の芋が鰻になつても、山猿がうなぎになつたと云ふ話は聞かないな。

願哲 はゝ、こいつは大笑ひだ。

助八 おい、與助。その山猿をおれに貸してくれ。

與助 え、どうするのだね。

助八 おれ一人が引つかゝれた上に、みんなのお笑ひ草になつちやあ割に合はねえ、そいつをこゝへ追つ放して、片つ端から引つ搔かして遣るのだ。

おかん (おどろく。) あれ、馬鹿なことをお云ひでないよ。呆れた人だねえ。あき

雲哲 悪巫山戯はいけない、いけない。(起ちあがる。)

(助八は猿を取らうとする。與助は遣るまいとする。この争ひのあひだに助八は又引つかゝれる。)

助八 あ、こん畜生め、又遣りやあがつたな。もういよく料簡れうけんがならねえ。うぬ、生いき膽きざしを取つた上で、兩國りやうごくのもゝんじい屋へ賣飛ばすからさう思へ。

與助 えゝ、人の商賣物をどうするのだ。

(助八と與助は争つてゐるところへ、上のかたより助八の兄助十、三十歳前後、これも鉢巻、刺青のある肌ぬぎ、尻端折りの跣足にて出づ。)

助十 やい、やい。なにを騒いでゐるのだ。煙草休みも好い加減にしろ。いつまでもこんな泥仕事をしちやあるられねえ。日の暮れねえうちに早く済して仕舞はなけりやあならねえのだ。みんなも精出して遣つてくれ。大屋さんに叱られるぞ。

與助 大屋さんに叱られては大變だ。さあ、行きませう。

雲哲 さうだ、さうだ。

願哲 やれ、やれ、又一と汗かくかな、

(與助と雲哲、願哲は上のかたに去る。)

助十 (おかんに。) おい、かみさん。おめえの宿やど六はどろくどうしたね。

おかん 奥に寝てゐますよ。

助十 冗談ぢやあねえ。一年に一度の井戸がへだから、長屋中の者がみんな商賣を休んで、かうして泥だらけになつて働いてゐるんぢやねえか。その最中に自分ひとり悠々いよく緩々くわんと寝そべつてゐる奴があるものか。あんまりお長屋の義理を知らねえ狸野郎の横わうち着野郎だ。ぬす人のひる寝も好加減にしろと云つて、早く引摺り起して來い。

おかん (むつとして。) 何もそんなに嘔鳴り散らさなくつてもいゝぢやありませんか。

亭主の代りにわたしが出てゐりやあお長屋の義理は済んでゐますよ。

助十 えゝ、おめえのやうな曳摺りひきず鼻かがによるによろしてゐたつて何の役に立つものか。

よし原の煤掃すすきとは譯すが違ちがはあ。早く亭主をひき摺り出せといふのに……。

助八 今までおれも氣が注つかなかつたが、こゝの權三はまだ出て來ねえのか。なるほど盜人のひる寢にも程があらあ。(おかんに。) さあ、早く連れて來ねえよ。

おかん おまへさん達は人聞ききが悪い。二口目にはぬす人のひる寢なんぞと、大きな聲で云つてお呉くんなさるなよ。内の人は夜の商賣が主だから、晝間寢てゐるのさ。それに不思議があるものかね。

助十 それを云へば、おれだつて同じ商賣で片棒をかついでゐるのぢやあねえか。そのおれが斯うして働いてゐるのに、相棒の權三が寢てゐるといふ法があるものか。

おかん 相棒と云つても、内の人は先棒だよ。ちつとは遠慮をするものさ。

助十 先棒でも後棒でも、斯ういふときに遠慮が出来るものか。

助八 先棒を嵩かさにきて、乙おつう大あ哥にい風かぜを吹かすなら、おめえの亭主なんぞは頼まねえ。これからは兄貴とおれとが相棒で稼かせぎに出るばかりだ。

おかん 兄弟が相棒で御神輿おみこしでもかつぎに出るのかえ。(土間を見返りてあざ笑ふ。) 肝か腎じんのかつぐ物があるかよ。

助十 (すこし詰まつて。) なに、駕籠なんぞは何處からでも拾つて來る。なあ、八。

助八 むゝ、大川へ行つてみる。そんな駕籠なんぞは上げ汐あしほで幾らも流れて來らあ。

おかん 下駄の古いのと一緒になるものかね。ばか／＼しい。詰らない無駄口をおききでないよ。

助十 手前の方がよつぽど無駄口を利きいてゐやあがる。河岸の切見世きりみせでぺちやくちや嘯さへづつてゐた癖がぬけねえので、近所となりは大迷惑だ。おなじ年明ねんあきを引摺り込むにしても、もう少し眞人間らしいのを連れて來ればいゝのに、權三の奴めも見かけによらねえ洩はなつ垂たらし野郎だ。

(奥の障子をあけて權三、これも三十歳前後の刺青のある男、浴衣の片褌を取りながら出づ。)

權三 やい、やい。さつきから奥で聞いてゐりやあ、手前たちは兄弟揃つて、よくも口から出放題の惡體あくたいもくたいを列なら立てやあがつたな。なるほど俺のかゝあは吉原の河岸見世にゐた女で、飛んだ惚のろけをいふやうだが、おたがひに好き合つて夫婦になつたのだ。それがなんで洩つ垂らしだ。惚れた女とは夫婦になるなといふ奉行所のお觸れでも出たのか。ざまあ見やがれ。

おかん ほんたうに近所迷惑とはこつちで云ふことさ。よるも晝も兄弟喧嘩を商賣のやうにしてゐて、その仲裁に行くのはいつでもあたしの役ぢやあないか。

助八 えゝ、手前たちこそ毎日毎晩、犬も食はねえ夫婦喧嘩ばかりしてゐやあがつて、その留とめをとこ男の役はいつでも誰が勤めると思つてゐるのだ。

助十 まあ、まあ、だまつてゐろ。こんなすべた女郎を相手にしたつて始まらねえ。やい、権三。(縁に腰をかける。)手前も海驢あしかの生れ變りぢやああるめえ。なんで一日寝そべつてゐるのだ。長屋中が惣出そうでの井戸がへを知らねえか。寝ぼけた面つらを早く洗つて、みんなと一緒に綱を引きに出て來い。ふだんから相棒のよしみに、長屋の義理や附合ひといふものを教へてやるのだ。ありがたいと思つて禮をいへ。

権三 それだからおれの名代みやうだいに、鼻をこの通り出してあるぢやあねえか。一軒の家から一人づつ出りやあ澤山だ。

助十 女なんぞは頭數ばかりで役にやあ立たねえ。おれの家ぢやあ斯うして大の男が兄弟揃つて出てゐるのだ。

権三 そりやあ手前たちの物ずきで勝手に騒いでゐるのよ。だれも頼んだわけぢやあねえ。折角よく寝てゐるところを、無暗にがあゝ呻鳴りやあがつて、たうとう起してしまや

あがつた。(眼をこする。)おい、おかん。茶を一杯くれ。

おかん あい、あい。

(おかんは茶を汲んでやれば、権三は飲む、この時、上のかたにて大勢の聲きこゆ。)

大勢 さあ、さあ、引いた、引いた。

助八 あにい、又始まつたぜ。早く行かう。

助十 むゝ、こんな奴等にかゝり合つてゐると、日が暮れらあ。

大勢 引いた、引いた。

助十 おうい。待つてくれ。

助八 待つてくれ。

(助十と助八は鉢巻をしめ直して、急いで上のかたへ行く。)

おかん ほんたうに憎らしい奴だねえ。あたしももう行くまいかしら。

権三 かまふものか。打つちやつて置け。(團扇うちばを取る。)(このごろは書間でも藪つ蚊が

出て來やあがる。

おかん 暑い暑いと云つても、もう秋だとみえて、縞しまのお袴はかまをはいた蚊がだんぐりに大き

くなつて來たねえ。

(おかんも澁團扇をとつて權三を煽^{あふ}いでやる。)

權三 おや、おや、手前けふは忌^いに亭主孝行^いだな。今の話でむかしの事を思ひ出したか。

おかん なに、あいつ等へ面當^{つらあ}てさ。

權三 面當^{つらあ}てでなけりやあ大事^{だいじ}にしてくれねえのか。心ほそいことだな。

(上のかたにて又もや大勢の聲きこゆ。)

大勢 引いた、引いた。エンヤラサア。

(上のかたより以前の雲哲と願哲が先に立ちて井戸換への綱を引き、つゞいて長屋の男二人と子供一人、その次に助十、いづれも綱をひいて出づ。又そのあとから長屋の女房と娘、つゞいて猿まはし與助は猿を背負ひ、その次に助八、長屋の男、子供など同じ綱をひいて出づ。井戸端にては水をあける音。一同は又引返して上のかたに入る。)

助十 (行きながら權三を見かへる。) やい、この野郎。早く出て來ねえか。

權三 勝手にしやがれ。

助十 なんだ。(寄らうとして、綱にひかれてよろことなる。) え、さう無暗に引いちやあいけねえ。やい、權三、手前はどうしても出て來ねえのか。え、さう引いちや

あいけねえと云ふのに……。

(助十は綱に引かれて、よろけながら上のかたへ引返して入る。與助と助八はあとに残る。)

助八 (これも行きながら権三夫婦を見て。) やい、やい、夫婦ながら唯見てゐることがあるものか。お祭が通るのぢやあねえ。早く出て来い。こいつ等、出て来ねえと唯は置かねえぞ。

(助八は寄らうとすると、與助の猿はその頭髻たぶきをつかんで引く。)

助八 えゝ、だれだ、誰だ。悪ふぎけをしちやあいけねえ。止せ、よせ。

(助八は猿に引かれながら、上のかたに入る。)

権三 (笑ふ。) はゝ、好い觀みせ物だぜ。

おかん あいつはさつきも猿に引つかゝれたんだよ。

権三 あんな奴等は猿を相手に、きやつくと云つてゐるのが丁度相富だ。

おかん ほんたうに猿芝居の役者だねえ。

(夫婦は笑つてゐる。やがておかんは氣がついたやうに上のかたを見かへる。)

おかん お長屋の人達がみんな出てゐるのに、中途から抜けてしまふのも何だから、せめ

てあたしだけでも行つて來ようかねえ。

權三 なに、打つちやつて置けといふのに……。ぐづぐづ云ふのは助の兄弟ぐらゐのものだ。ほかにも文句をいふ奴があつたら、どいつでもおれが相手になつて遣らあ。長屋中が東たはになつて來ても、びくともするもんぢやあねえ。矢でも鐵砲でも持つて來いだ。

おかん でも、大屋さんに叱られると困るぢやあないか。

權三 むゝ。(少し考へる。)去年もさん／＼あぶら膏を取られたつけな。

おかん それ、御覽な。ほかの奴はどうでも構はないけれど、大屋さんの心持を悪くするといけないからねえ。

權三 だが、大屋さんは善い人だ。まさかに店立たなだては食はせるとも云ふめえ。

おかん 善い人だけに、こつちでも其のつもりで附合はなくちやあ悪いよ。

權三 さうかなあ。(又かんがへる。)ぢやあ、いつそおれが行つて來ようか。(起ちかけて又かんがへる。)だが、これからのそく出て行くと、なんだか助の野郎におどかされたやうで、ちつと癩しやくだな。おれはまあ止さう。おめえも止せよ。

おかん 止してもいゝかねえ。

權三 大屋さんに叱られたら、あやまる分のことだ。なに、むづかしいことはねえ。あや

まれば吃きつと堪忍してくれるよ。

おかん あの小屋さんにあやまるのは、幾らあやまつても口惜しくはないけれど……。
権三 それだからあやまると決めて置けばいゝよ。

(上のかたより助八は猿を引つかゝへて出づ。あとより與助が追つて出づ。)

與助 これ、これ、わたしの猿をどこへ持つて行くのだ。

助八 こん畜生、二度も三度もおれにからかやあがつて……。もう生かして置かれるものか。あの井戸へ叩つ込んでしまふのだ。(上のかたへ引返して行きかゝる。)

與助 えゝ、飛んでもないことだ。

(與助は猿を取返さうとして争ふところへ、上のかたより助十出づ。)

助十 これ、八。馬鹿なことをするなよ。

助八 なにが馬鹿だ。

助十 この最中に猿なんぞを相手にして騒いでゐる奴は馬鹿に相違ねえ。そんなものは打ちやつて置いて、早く行け、行け。

助八 いやだ、いやだ。こん畜生を井戸へ叩つ込まなけりやあ料簡出来ねえ。

助十 折角井戸がへをしたところへ、そんなものを叩つ込まれて堪るものか。馬鹿野郎、

よせと云ふのに……。

助八 止よさねえ、止さねえ。

助十 そんなら猿の身代りに手前をぶち込むからさう思へ。

助八 なにを云やあがる。

(兄弟はむしり合ひ、なぐり合ひの喧嘩になる。その隙をみて與助は猿を取返し、逆さまに背負ひて上のかたへ走り去る。)

権三 仕様のねえ奴等だな。(おかんに。)留めてやれ、留めてやれ。

(夫婦は縁から降りて、無理に兄弟を引き分ける。)

権三 毎日めづらしくもねえ、兄弟喧嘩はよせ、よせ。

おかん 八さんも兄さんに楯たてを突くのはよくないよ。

助八 べらぼうめ。猿の味方をして弟をなぐるやうな奴は兄貴ぢやあねえ。

助十 手前のやうな判らずやは猿にも劣つてゐるのだ。

権三 まあ、いゝと云ふことよ。兄弟喧嘩ぢやあ、どつちから膏藥代かうやくだいを取るわけにも行

かねえ。つまり殴られ損だ。止せ、止せ。

(上のかたより家主六郎兵衛出づ。)

六郎 これ、これ、みんな何をしてゐるのだ。もう些ちつとだから怠けてはいけない。(上のかたに向つて團扇をあげる。) さあ、さあ、早く引いた、引いた。

(上のかたより雲哲、願哲をはじめ長屋の人々は綱を持ちて出で來り、再び上のかたへ引返してゆく。)

六郎 助八。おまへはこの忙がしい最中に猿にからかつて騒いでゐたさうだな。

助八 なに、こつちが猿にからかはれたので……。

六郎 まあ、なんでもいゝから早く行つて、手傳へ、手傳へ。貴様は長屋で一枚看板の馬鹿野郎だ。

助八 あい、あい。大屋さんに逢つちやあかなはねえ。

(助八は叱られて、これも早々に上のかたへゆく。)

おかん 大屋さん。今日はお暑いのに御苦勞様でございます。

権三 まあ、まあ、こゝへお掛けなせえ。

六郎 (権三を見て。) おゝ、お前はさつきから井戸端へ些とも顔を見せなかつたやうだな。
な。

権三 (ぎよつとして。) え。實は其、すこし用がありました……。

おかん 早くあやまつておしまひよ。(眼で知らせる。)

権三 まつたく據よんどころない用がありまして……。

六郎 よんどころない用があつた……。

権三 へえ、急病人が出来まして……。

助十 いや、こいつ呆れた奴だ。もし、大屋さん。だまされちやあいけねえ。そんなことは皆んな嘘ですよ。

(夫婦はあわてて手をふる。)

助十 (いよゝゝ吠鳴る。) えゝ、嘘だ、嘘だ。大うその川かはうそ獺だ。奥に樂々と晝寢をしてゐやあがつて、おれが幾度催促に來ても出て來なかつたぢやあねえか。

権三 だから、急病人が出来たと云つてゐるのが判らねえかよ。

助十 その急病人はどこにゐる。

権三 その急病人は……。おれだ、おれだ。

助十 這こいつ奴いよゝゝ呆れた奴だ。朝つぱらから酒を飲んでゐやあがつた癖に、急病人もよく出來た。あんまり人を馬鹿にするな。

おかん そのお酒に中あたつたんですよ。

助十 えゝ、なにも彼も嘘だ、嘘だ。

六郎 成程これは嘘らしいぞ。これ、權三。おまへは去年のことを忘れたか。一年に唯たつた一度の井戸がへで、家主のおれまでが汗みづくになつて世話を焼いてゐる。そのなかで假けびやう病の晝寢なぞをしてゐて、長屋の義理が濟むと思ふか。去年もあれほど叱つて置いたのに、今年も相變らず横着をきめるとは太い奴だ。又、女房も女房だ。さつきちよいと其の生なまつちろ白い顔を出したかと思ふと、もうそれぎりで隠れてしまふとは、揃揃ひも揃揃つた横着者め。さあ、さあ、早く出て働け、働け。

夫婦 はい、はい。

(上のかたにて大勢の呼ぶ聲きこゆ。)

大勢 それ、引いた。引いた。エンヤラサア。

六郎 (上のかたを見て。) それ、引いて来る。早くしろ、早くしろ。

(助十は上のかたへ駈けてゆく。權三とおかんもかけ出してゆく。やがて上のかたより以前の如く、雲哲、願哲が先に立ち、長屋の男二人と子供ひとりが綱をひいて出づ。助十と權三とおかんも綱をひいてゐる。この時、下のかたの路地口より小間物屋彦三郎、廿歳ぐらゐの若者、旅すがたにて出づ。)

助十 さあ、さあ、引け、引け。

権三 引いたり、引いたり。

一同 エンヤラサア。

(彦三郎は綱をひく人々を避けながら來るうちに、助十に突きあたる。)

助十 え、なにをしやあがる。

(助十に突き退けられて、彦三郎はよろめきながら更に権三に突きあたる。)

権三 この野郎、邪魔な奴だ。

(権三に蹴られて、彦三郎はつまづき倒れる。水の音。一同は見返りもせず、綱を

ひいて上のかたへ引返して去る。)

六郎 これ、これ、手暴てあいことをするな。(彦三郎を介抱する。)もし、飛んだ失禮をい

たしました。

彦三郎 お江戸馴れませぬ者がお取込みのなかへ出まして、わたくしこそ飛んだお邪魔を

いたして相済みません。

六郎 いや、お若いにも似合はず御丁寧の御挨拶で、重々痛み入りました。御覽の通り、

けふはこの長屋の井戸換へで混雑してゐるところへ、丁度におまへさんがお出でなすつ

たので、どうもお氣の毒なことを致しました。店子たなこに代つて家主のわたしがお詫をしますから、どうぞ料簡れうけんして遣つてください。おゝ、おゝ、泥だらけになつた。(手拭で彦三郎の膝のあたりを拭いてやる。)

彦三郎 いえ、おかまひ下さりますな。では、おまへ様がこゝのお家主様でござりまするか。
六郎 はい、はい。こゝは神田の橋本町、その長屋をあづかつてゐる家主の六郎兵衛でござりますよ。

彦三郎 おゝ、左様でござりましたか。

(この時、以前の長屋の女房と娘、その次に助八と長屋の男三人、與助と子供ふたりが綱をひいて出づ。)

助八 (彦三郎に。) えゝ、なにをぼんやり突つ立つてゐやあがるのだ。この案山かゝし子野郎め。邪魔だ、邪魔だ。

六郎 よそのお方に失禮をするな。おまへの方でよけて行け。馬鹿野郎め。

助八 又叱られたか。

(水の音。人々はわやく／＼云ひながら上の方へ引返して去る。)

六郎 こゝらの長屋にゐる者は我殺がさつな奴等ばかり揃つてゐるので、他國のお方にはお恥か

しょうございます。して、おまへさんは誰をたづねてお出でなすつた。

彦三郎 お家主様をおたづね申してまゐりました。

六郎 なに、わたしを尋ねて来た……。いや、それは、それは……。では、まあこゝへおかけなさい。

(六郎兵衛は先に立ちて、権三の家の縁に腰をかける。)

六郎 して、おまへさんはどこのお人だね。

彦三郎 大坂からまゐりました。

六郎 大坂からわたしを尋ねて……。では、もしや彦兵衛さんの……。

彦三郎 はい。わたくしはこのお長屋で長年お世話様になりました小間物屋彦兵衛のせがれ彦三郎と申す者でございます。

六郎 あゝ、彦兵衛さんの息子かえ。(急に顔色を曇らせる。) 遠いところをよく出て来なすつた。

彦三郎 (これも聲を曇らせる。) もし、お家主様。父の彦兵衛はまったく牢死いたしましたのでござりますか。

六郎 いや、どうもお氣の毒なことで、今更なんとも云ひやうがない。手紙にも書いてあ

げた通り、彦兵衛さんは去年の暮にお召捕になつて、その御吟味中に病氣が出て、この三月に……。 (鼻を詰まらせる。) たうとう御牢内で歿なくなりましたよ。

彦三郎 その節は色々御厄介になりました、お禮の申上げやうもござりません。まことに有難うござりました。(涙ながらに手をつく。) 御手紙によりますと、父は馬喰町の米屋といふ旅籠屋はたごやの隠居所へ忍び込み、六十三歳になる女隠居を殺害して、金百兩をうばひ取つたと申すこととござりますが、それは本當でござりますか。

六郎 (氣の毒さうに。) さあ、彦兵衛さんに限つてそんな事のあらう筈はないと思つてゐたが、御奉行所の厳しいお調べで本人はたうとう白状したと云ひますよ。

(上のかたより權三はぶら／＼出で來り、この體をみて少し躊躇ちうちよし、やがて拔足をして家のうしろを廻り、下のかたの柳の下に立つて聽いてゐる。)

彦三郎 それがどうしても本當とは思はれません。わたくしの父は盗みを働くやうな、まして人を殺して金をぬすむやうな、そんな不義非道の間人ではござりません。あまりに御吟味がきびしいので、身におぼえないことを申立てたのかも知れませんが。(だん／＼激して來る。) もし、おまへ様。いづれにしてもこれは何かの間違ひに相違ごござりません。屹きつと何かの間違ひでござります。

六郎 息子のおまへさんがさう思ひつめるのも無理はないが、この一件は南の町奉行所のお係りで、お役人は各奉行ときこえてゐる大岡越前守様だ。そのお捌きでさば落らく着ちやくしたことだから、決して間違ひのあらう筈はないのだ。

彦三郎 さきほどは御吟味中と仰しやりましたが、それではもう落着いたしたのでござり
ますか。

六郎 實は本人の白状で事件は落着、そのお仕置は獄門ときまつた時に、彦兵衛さんは牢死したのだ。もう何と云つても仕方がない。せめてその死骸を引取つてやりたいと思つて、色々お嘆き申してみたが、重罪人であるから死骸を下げ渡すことは相成らぬといふので、残念ながらどうすることも出来なかつたのだ。必ず悪く思はないで下さい。

彦三郎 情けないことでもござりますな。(泣く。)

(このあひだに、上のかたよりおかん出づ。権三は眼で招けば、おかんも竊そつと家のうしろをまはつてゆく。権三は何かさゝやけば、おかんは首肯うなづいて、再び下のかたより自分の家のうしろへ廻つてゆく。権三は助十の家の縁に腰をかける。)

彦三郎 (眼をふいて。) いくら名奉行でも、大岡様でも、このお捌きは屹きつと間違つて居ります。わたくしの父にかぎりまして、決してそんなことはない筈でござります。どう

考へても、それはお奉行様のお眼違ひでござります。

六郎（なだめるやうに。）まあ、まあ、落着いて物を云ひなさい。今更おまへが何と云つたところで、お捌きも濟み、本人も死んでしまつたものを、どうにも仕様があるまいではないか。

彦三郎 勿論唯今となりましては、たとひ何と申したところで死んだ父が生き返るわけはござりません。それはよんどころない不運と諦めも致しませうが、せめては無實の罪といふことをお上へ申立てまして、父彦兵衛の悪名を清めたくござります。お家主様。わたくしが一生のおねがひでござりますから、どうぞお力添へをねがひます。御承知の通り、父は大坂生れ、わたくしも御當地は初めてで、右を見ても左を見ても、誰ひとり頼みになる人はござりません。もし、お家主様。（手をあはせる。）お願いでござります。お願いでござります。

六郎 あゝ、そんなことを云つて泣かせてくれるな。（眼をふく。）折角のおまへの頼みだ。わたしも何うかして遣りたいのは山々だが、こればかりはどうも困つたな。（かんがへてゐる。）

（このあひだに、家の奥よりおかんがそつと出で、そこにある團扇を把つて、氣のつ

かぬやうに六郎兵衛と彦三郎を煽いでゐる。上のかたより助十は汗をふきながら出づ
)。

助十 あゝ、あつい、暑い。

権三 (小聲で。) おい、おい。

助十 なんだ。

(権三は彦三郎を指さして眼で知らせれば、助十もうなづいて、竊そつと家のうしろを廻
 つてゆく。)

彦三郎 もし、心ばかりは逸はやつても、わたくしは若じやくねんもの年者、殊に御當地の勝手は知れず、
 なんとも致方がござりません。おまへ様によい御分別はござりますまいか。

六郎 まあ、待つてくれ。わたしも頻しきりに考へてゐるのだが、これはなか／＼むづかしい。
 彦三郎 むづかしいと申しても、どうしても此儘では濟まされません。大坂を立ちます時
 にも、お父さんに限つてそんなことのあらう筈がないから、わたしがどんな難儀をして
 も、屹とお父さんの無實を訴へて來ると、母や弟にも立派に約束して參つたのでござり
 ます。

六郎 さうやかましく云はれると、氣が散つてならない。まあ靜かにして考へさせてくれ

なければいけない。

彦三郎（せいて。）このまゝのめくと戻りましては、母にも弟にも會はず顔がござりません。わたくしを生かすも殺すも、おまへ様のお心一つでござります。

六郎 むゝ、判つた、判つた。よく判つてゐます。それだからわたしも色々こころに工夫を凝してゐるのだ。（上の方に向つて。）おい、おい。そつちの井戸がへも少し待つてくれ。さうざうしいと、どうも好い智慧が出ない。

（六郎兵衛は又かんがへてゐるを、彦三郎は待ち兼ねるやうに眺めてゐる。おかんは貰ひ泣の眼をふいてゐる。）

権三（小聲で。）どうだい。いつそ思ひ切つて云つてみようか。

助十 だが、あぶねえ。うっかりした事を云つて、飛んだ係り合ひになると詰らねえぜ。

権三 それもさうだが……。 （考へる。）大屋さんも困つてゐるやうだ。第一あの若けえのが可哀さうぢやあねえか。

助十 おれも可哀さうだとは思ふのだが、なにしろほかの事と違ふからな。一つ間違つた日にやあ、おれ達がどんな目に逢ふか判るめえぢやあねえか。よく考へてみるよ。

権三 むゝ。（少し躊躇する。）

彦三郎 もし、お家主様。まだお考へは付きませんか。

六郎 (ため息をつく。) どうも困つたな。わたしも橋本町の六郎兵衛といへば、名主の

玄關でも御奉行所の腰掛けでも、相當に幅のきく人間だが、こればかりは全く困つた。

一旦お捌さばきの付いてしまつたものを、今更こつちからこぢ返すといふのは、つまり大岡様を相手取つて喧嘩をするやうなものだから、こいつは並大抵のことで行く筈がない。

小間物屋彦兵衛は確かに無實の罪だといふ立派な證據でもあるか、それとも罪人はほかにあると云ふ確かな證人でもない限りはなあ。(腕をくむ。)

(權三は何か云はうとして起ちかゝるを、助十はあわててその袖をつかみ、まあ待てと制すれば、權三はまた躊躇する。)

彦三郎 (堪へかねて。) では、どうしても出来ぬことだと仰おつしやるのでござりますか。

六郎 さあ、出来ないとも限らないが、なにしろこいつは大仕事だ。わたしもこの年になるまで家主を勤めてゐるが、こんなことに出逢つたのは初めてだからな。

彦三郎 (決心して。) では、もうお頼み申しますまい。わたくしは自分の思ひ通りにいたします。(起ちかゝる。)

六郎 (彦三郎の袖を捉へる。) まあ、待ちなさい。お前さんは眼の色を變へてどうする

積りだ。

彦三郎 これから御奉行所へ駈込みます。

六郎 御奉行所へかけ込む……。それはいけない。駈込み訴へは御法度だ。

彦三郎 それはわたくしも存じて居りますが、もうかうなつたら致方がござりません。どんなお咎めを受けるのも覺悟の上で、駈込み訴へをいたします。どうぞ留めずに遣つて下さい。（振切つて行かうとする。）

六郎 どうして無暗に遣られるものか。飛んでもないことだ。いくら年が若いと云つて急いてはいけない。まあ、待ちなさい。待ちなさい。

彦三郎 いや、放して下さい。放して下さい。

六郎 いけない、いけない。

（彦三郎は無理に振切つて行かうとするを、六郎兵衛は留める。おかんはうろくししながら権三を手招ぎし、なんとかしろと云ふ。権三ももう堪らなくなつて進み出で、彦三郎の前に立塞がる。）

権三 まあ、おまへさん。待ちなせえ。

彦三郎 え、どなたも邪魔をして下さるな。

(彦三郎は突きかけて行かうとするを、権三は抱きとめる。)

権三 邪魔をするわけぢやあねえ。おれが好い智慧を貸してやるのだ。やい、やい、助十。見てゐることはねえ。一緒に留めてくれ、留めてくれ。

おかん (縁に出る。) 助さんも早く何とかおしなねえ。

(助十も決心して起つ。)

助十 (彦三郎に。) まあ、待ちなせえ。待ちなせえ。まったくおれ達が好い智慧を貸してやるのだ。まあ、まあ、落ち着いて云ふことを聞くがいゝぜ。

権三 まあ、おとなしくしろ、おとなしくしろ。

(権三と助十は無理に彦三郎を元の縁さきに押戻す。)

六郎 井戸がへで汗になつたところへ、また汗をかゝされた。やれ、やれ。(汗を拭く。)

そこでお前達はほんたうに好い智慧があるのか。

権三 さう改まつて聞かれると少し困るが……。おい、助十。おめえから云へ。

助十 いや、おれはいけねえ。おれは不斷から口不調法だからな。

権三 うそをつけ。人一倍大きな聲で呶鳴りやあがる癖に……。

助十 えゝ、手前こそ矢鱈やたらに無駄口をきくぢやあねえか。

六郎 これ、これ、そんなことを云つてゐては果てしが無い。おい、権三。先づおまへから口をきけ。

権三 どうしてもわつしが口切りかえ。やれ、やれ。

六郎 何がやれくだ。おれが名指しでお前に聞くのだから、さあ、はつきりと云へ。

権三 仕様がねえな。(頭をおさへる。)ぢやあ、まあ聽いておくんなせえ。實はね、去年の十一月の末のことでごぜえました。(助十に。)おい、あれは幾日だつけな。

助十 さあ、おれもよくは覺えてゐねえが、なんでも二の西とりの前の晩あたりぢやなかつたかな。

権三 違えねえ、二の西の前の晩だ。その晩の九つ過ぎでもありましたらうか、この助十とわつしとが遅い仕事から歸つて來まして、馬喰町の横町へ差しかゝると、頬かむりをした一人の野郎が天水桶で何か洗つてゐるやうでしたから、何をしてゐるのかと提灯の火で透かしてみると、そいつは着物の袖を洗つてゐるらしいのです。

六郎 むゝ。それから何うした。

権三 (助十をみかへる。)おい、おれにばかり云はせてゐねえで、手前も些ちつとしゃべれよ。かうなりあ何どうでお互たげえに係り合だ。

六郎 では、助十。そのあとを早く云へ。

助十 もし、大屋さん。うっかりした事をしやべつて、若しそれが間違ひだった時には、どういふことになりませうね。

六郎 それは事にもよるな。その事によつて重い罪にもなれば、軽い罪にもなる。

助十 人殺しなんぞは重い方でせうね、

六郎 それは勿論のことだ。

助十 いけねえ、いけねえ。それだからおれは忌^{いや}だといふのだ。権三。手前は勝手に何で
もしやべれ。おらあ知らねえ、知らねえ。

権三 知らねえことがあるものか。おれと相棒をかついでゐたんぢやあねえか。

おかん (権三に。) もし、お前さん。そんな人にかまはないで、知つてゐることがある
なら早く云つておしまひなさいよ。あたしも何だか聴きたくなつて來たからさ。

彦三郎 (すり寄る。) どうぞ早く話して下さい。

権三 たうとうおれが人身御供^{ひとみごけう}にあげられてしまつたか。ぢやあ、まあ話ませう。今も
いふ通り、天水桶で袖を洗つてゐるだけならば、別に不思議と云ふほどのことでもねえ
が、そいつが光るものを持つてゐる。

六郎 光るものを持つてゐた……。それから何うした。

(人々はすり寄つて聴く。)

権三 その光るものを水で洗つてゐたんですよ。

六郎 天水桶で袖を洗ひ、何か光るものを洗つてゐたのだな。その光る物といふのは刃物らしかつたか。

権三 どうもさうらしいやうでした。それでもその時はたゞ變な奴だと思つたばかりで通り過ぎてしまつたのですが、明る朝になつて聞いてみると、その晩馬喰町の米屋といふ旅籠屋(はたご)の隠居所で、六十幾つになる隠居婆さんが殺されて、門跡様(もんせきさま)へ納めるとかいふ百兩の金を取られたさうで、わつしもびつくりしましたよ。

六郎 むゝ。(かんがへる。)して、その男はどんな風體(ふうたい)で、年頃や人相は判らなかつたか。

権三 さあ、そこだ。(助十に。)おい、いゝかえ。思ひ切つて云つてしまふぜ。

助十 まあ、待つてくれ。もし、大屋さん。これから権の野郎が何を云ひ出すか知りませんが、わつしに係り合を付けねえで下さいよ。わつしはなんにも知らねえんだから……。権三 いや、さうは行かねえ。おれと相棒である以上は、どうしたつて手前もかゝり合ひ

だぞ。

助十 だつて、おれはなんにも云はねえ。

権三 云つても云はねえでも同じことだ。

おかん まあ、そんなことは何うでもいゝから、肝腎のところを早くお云ひなさいよ。じれつたい人だねえ。

六郎 まつたくおれも焦じれつたい。さあ、早く云へ、早く云へ。

彦三郎 さあ、早く聞かしてください。(詰めよる。)

権三 寄つて集たかつておればかり虐いぢめちやあ困るな、助の野郎め、狡い奴だ。おぼえてゐろ。

彦三郎 もし、早く云つてください。早く……早く……。

権三 云ふよ、云ふよ。かうなつたら何でも云つて聞かせるよ。その男は……年頃は三十

四五で、職人のやうな風ふう體ていで……。

彦三郎 職人のやうな風體でござりましたか。

助十 (権三に。) おい、おい。もうその位にして置くがいゝぜ。

六郎 やかましい、黙つてゐろ。(権三に。) まだそのほかに何か目じるしは無かつたか。

権三 さあ。(躊躇する。)

六郎（嚇すやうに。）これ、権三。なぜおれの前で隠し立てをする。正直に云はないとお前の爲にならないぞ。

おかん お前さん、なぜ隠してゐるんだねえ。をかしいぢやあないか。

権三 えゝ、もう自棄だ。みんな云つてしまへ。（少し聲をひそめて。）夜目ではあり、そいつは頬ほ被りかむをしてゐたので、確なことは云へねえが、どうもそれが近所の奴らしいので……。

六郎 むゝ、近所の奴……。誰だ、誰だ。

権三（思ひ切つて。）豊島町の裏にゐる左官屋の勘太郎によく似てゐたんですよ。

おかん まあ。あの人が……。

六郎 左官屋の勘太郎……。あいつによく似てゐたのか。これ、助十。どうでお前もかゝ

り合だから、正直に云はなければならぬぞ。まったく其奴は勘太郎に似てゐたのか。

助十 かうなりやあ俺ももう自棄だ。（大きな聲で。）そいつは豊島町の勘太郎、左官屋の勘太郎、たしかにあの勘太郎に相違ねえのだ。

六郎 これ、大きな聲をするなよ。

彦三郎 あゝ、ありがたい、有難い。お二人さんはわたくしに取つて神様と云はうか、佛

様と申さうか。もし、もし、この通りでござります。(手をあはせて權三と助十を拜む。)

おかん それにしても、お前さん達の氣が知れないぢやあないか。それほど判つてゐるならば、なぜ早くそのことを云ひ出して、彦兵衛さんの無實の災難を救つて上げなかつたんだらうねえ。

權三 そのときに氣がつけば格別だが、あとになつちやあ無證據だ。うつかりしたことが云はれるものか。どんな係り合になるかも知れねえ。

六郎 それで二人ともに黙つてゐたのか。横着者にも似合はない、氣の小さい奴等だな。

おかん 彦兵衛さんに疑ひのかゝつたのは、どういふわけだかよくは知らないけれど、不斷から正直者のあの人がお繩にかゝつて連れて行かれるのを、一つ長屋内で見えてゐながら、今まで黙つてゐるといふことがあるものかね。お前さん達は随分不人情だよ。

六郎 まつたく女房のいふ通りだ。せめておれだけでも内々で話して置いおくれ、なんとか仕様のあつたものを……。 (叱るやうに。) それほどの事を知つてゐながら、今まで口をふいて黙つてゐるとは何のことだ。つまり貴様達が彦兵衛さんを見殺しにしたやうなものだ。これ、彦三郎さん。お前さんのお父さんのかたきはこの權三と助十だ。

なんの、禮をいふことがあるものか。わたしが證人になつてやるから、こゝで立派にかたき討をしなさい。

(権三と助十はびつくりする。)

権三 と、とんでもねえ。なんでおれ達が仇なものか。

助十 かたきと云ふのは勘太郎だ。

権三 あの勘太郎だ。

(云ひながら二人は逃げかゝる。)

六郎 待て、待て。貴様たちが逃げたからと云つて濟むわけのものではない。かたき討は免^{ゆる}してやる代りに、その罪ほろぼしに彦三郎さんの味方をするか。

権三 (助十と顔を見あはせる。) あい、あい。きつと味方を致します。

六郎 よし、よし。それならば仕様がある。(上のかたに向ひて。) おい、おい。誰か來てくれ。早く來てくれ。

(上のかたより助八を先に、雲哲と願哲出づ。)

六郎 おゝ、助八。おまへの家に麻繩のやうなものは三本ほどないか。

助八 さあ、三本はどうだかな、

おかん 内にも一本ぐらゐはありましたよ。

助八 なにしろ探して來ませう。

(助八は我家に入る。おかんも奥に入る。)

雲哲 用はもうそれだけかね。

六郎 いや、おまへ達もそこにてくれ。まだ外にも用があるのだ。

(おかんは奥より麻繩一本持ち出て出づ。)

おかん これで間に合ひますかえ。

六郎 よし、よし。(繩をうけ取る。)

(助八も奥より麻繩二本を持ち出て出づ。)

助八 大屋さん。これでいゝかね。

六郎 むゝ、これで丁度三本揃つた。

助八 そこで、これをどうしなさるのだ。

六郎 人間三人を縛しばるのだ。

一同 え。

權三 三人といふのは、誰と誰とを縛るんですね。

六郎 先づ貴様を縛る。

権三 え。

六郎 それから助十を縛る。

助十 え。

六郎 それから彦三郎さんを縛る。

彦三郎 わたくしもお繩にかゝるのでござりますか。

六郎 この三人を數珠じゆずつなぎにして、南の御奉行所へ牽ひいて行くのだ。

助八 いけねえ、いけねえ。あとの二人はどんな悪いことをしたか知らねえが、おれの兄貴に限つちやあ繩をかけられるやうな覺えはねえ筈だ。ふだんから兄弟喧嘩こそしてゐるが、おれに取つちやあ唯つた一人の兄貴だ。いはれも無しに繩附きにされて堪たまるものか。なんでおれの兄貴を縛るのだ。その譯をいへ。譯をいへ。

六郎 さうむきになつて怒るなよ。これには譯のあることだ。こゝにゐる若い人は小間物屋の彦兵衛さんの息子で、これからおまへの兄貴と権三を證人にして、お父さんの無實の罪を訴へて出ようといふのだ。

助八 證人ならば家主が附添ひで、おとなしく連れて行くがいゝぢやあねえか。なんで繩

をかけるのだ。

六郎 そのわけは今云つて聞かせる。みんなもよく聞け。今度の一件は並一通りのことではないけない。本来ならばこの彦三郎さんがどこにか宿を取つて、その町名主の手から御奉行所へ訴へて出るのが順當だが、そんなことでは容易に埒が明かないばかりか、一旦落着したお捌きの再吟味を願ふなどと云つては、御奉行様のお手許まで達かないうちに、下役人の手で握り潰されてしまふのは知れてゐる。そこでおれが考へたには、この三人に繩をかけて御奉行所へ牽いて行つて、小間物屋彦兵衛のせがれ彦三郎と申す者がわたくし方へ押掛けてまゐり、父彦兵衛は決して盗みなど致すものでない。それを罪人と定められたは恐れながらお上のお眼がね違ひ、二つには家主の不穿索と、さん／＼の悪口を云ひ募るのみか、長屋の駕籠かき權三助十の兩人もその腰押しをいたして、理不盡の亂暴狼藉をはたらき……。

權三 (おどろいて。) 嘘だよ、うそだよ。おれ達が何をするものか。

助十 御奉行所へ行つて、そんな出鱈目を云はれちやあ大變だ。

六郎 まあ、騒ぐなよ。そのくらゐに云はなければ中々お取上げにはならないのだ。そこで、よんどころなく長屋中の者うち寄つて右三人を取押へ、かやうに引立ててまゐりま

したれば、何とぞ上の御威光を以て彼等に理解を加へ、穩便をんべんに引取りまするやうに御お取計とりはからひを願ひ上げますると、おれの口から斯う訴へ出るのだ。どうだ、判つたか。かうすれば屹とお取上げになるに違ひない。

助八 なるほどさうかも知れねえな。こいつは巧めえことを考へ出したね。

おかん 大屋さんは正直な人だと思つてゐたら、うそをつくのは中々上手だわねえ。

助八 まつたく隅へは置かれねえや。

六郎 つまらないことを褒めるな。こつちは一生懸命だ。そこで、お白洲しろすへ呼び込まれたら、それからはめいゝの腕次第で、彦三郎さんは自分の思ふことを存分に云うが好し、權三と助十は自分の見た通りを逐一申立てて、馬喰町の隠居殺しはどうしても勘太郎の仕業であらうと存じますと、はつきり云ふのだ。(考へて。)彦三郎さんは大丈夫だらうが、おまへ達にそれが出来るか。

權三 出来ても出来ねえでも仕様がねえ。今も鼻かゝあに云はれた通り、一つ長屋の彦兵衛さんが繩付きになつて出て行くのを知つてゐながら、今まで黙つてゐたのはどうも良くねえ。實はわつしも内々は氣が咎とがめて、なんだか寢ざめが好くなかつたのだから、その罪ほろぼしに出来るだけ遣つてみませうよ。

彦三郎 なにぶんお願ひ申します。(助十に。)おまへさんにも宜しくお頼み申します。

助十 まあ、心配しなさんな。かう見えても江戸つ子の神田つ子だ。自棄やけのやん八で度胸を据ゑた日にやあ、相手が大岡様でもなんでも構はねえ、云うだけのことは皆んなべらく云つて遣らあ。細工は流りう々々、仕上げを御覽ごらんじろだ。

權三 おや、おや、手前は急に強くなつたぜ。變な野郎だな。

六郎 だが、まあ、強くなつた方は結構だ。その勢ひで皆んな縛られてくれ。

おかん (かんがへる。)縛られて行つて、すぐに歸して下さるでせうかねえ。

六郎 それは受合へない。町内あづけどでも來れば占しめたものだが、吟味中は一先づ入じゅう牢らうといふことになるかも知れないな。

おかん あら、牢に入れられるの……。 (泣き出す。)お家主さん。それぢやああんまりぢやありませんか。罪もない内の人を牢へ入れて……。若しいつまでも歸されなかつたら、お前さんどうしてくれるんですよ。

助八 吟味中は入牢なんていふことになる、兄貴もちつと可哀さうだな。もし、大屋さん。兄貴の身代りにわつしを縛つて行つてくれませんか。どうせ拵こしらへ事なら兄貴でも弟でも構ふめえ。わつしの亂暴は世間でも皆んな知つてゐるんだから、わつしが暴れた

といふ方が却つて本當らしいかも知れませんぜ。

六郎 だが、その晩のことを詳しくお調べになつたときに、本人でないまをしぐちと申口が曖昧になつていけない。やつぱり兄貴を縛るより外はないな。

助八 (助十の顔をのぞく。) 兄い、おめも好いかえ。

助十 いゝよ、いゝよ。大丈夫だ。

助八 だが、どうもおれを遣つた方がよささうだな。大屋さん、どうしてもいけませんかえ。

六郎 まあ、まあ、さう案じることはない。(おかんに。) おまへも泣くなよ。自慢ぢやあないが、大岡様とこの家主が附いてゐるのだ。決して悪いやうにはならないよ。

おかん (不安らしく。) それもやつぱり大屋さんの嘘ぢやありませんかえ。

六郎 おれだつて無暗に嘘をつくものか。安心しろよ。

おかん 若しもこれぎり以内の人が歸つて來なかつたら、屹とおまへさんを恨むからさう思つておいでなさいよ。(泣く。)

彦三郎 (氣の毒さうに。) どうも皆さんに御迷惑をかけまして、なんとも申譯もないことでございます。(六郎兵衛に。) では、お繩をおかけ下さりませ。(兩手をうしろへ

廻す。）

六郎 おまへさんはわたしが縛る。（雲哲等に。）おまへ達は權三と助十を縛つてやれ。

雲哲 あい、あい。長屋中の持て餘し者がどつちもたうとう繩付きか。

願哲 これだから悪いことは出来ないな。

權三 なにを云やあがる。手前たちの知つたことぢやあねえ。

助十 あとでびつくりしやあがるな。さあ、どうとも勝手にしやあがれ。

（權三も助十も覺悟して縛られようとする。）

六郎 これ、ちつとぐらゐ痛くつても構はない、遠慮なしにぐる／＼巻きにふん縛れよ。

雲哲 大屋さんからお許しが出たのだ。せいぜい嚴重に縛つてやれ。

願哲 はゝ、面白い、面白い。

おかん なにが面白いものか。ほんたうに好い面の皮だ。

助八 こいつ等、面白半分に騒ぎ立てやあがると、おれが料簡しねえぞ。

六郎 はて、喧嘩をしてはならない。靜かにしろ、靜かにしろ。

（雲哲と願哲は笑ひながら二人を縛りあげる。六郎兵衛も彦三郎を縛る。）

六郎 ところで、そつちの二人は兎も角も、この人を數寄屋橋内まで引摺つて行くのは可

哀さうだ。(土間をみかへる。)おゝ、丁度そこに駕籠がある、と云つて、權三と助十は繩附きで擔がせるわけにも行かず、これ、助八。だれか相棒をさがして擔いで行け。

助八 え、おれにかつがせるのかえ。

六郎 あたりまへよ。貴様の商賣ではないか。

助八 商賣は商賣だが、こいつは氣のねえ仕事だな。どうで酒手さかては出やあしめえ。

六郎 ぐづぐづ云はずに、早く相棒を見つけて來いよ。おゝ、誰彼といふよりも、雲哲、おまへが片棒かついでやれ。

雲哲 大屋さんのお指圖だが、これは難儀だ。おれも弔とむらひの差さし荷になひはかついだが、生きた人間を乗せたのはまだ一度も擔いだことがないので……。

助八 まあ、仕方がねえ、おれが先棒になつて遣るから、あとからそろく附いて來い。

さあ、手をかせ。

雲哲 やれ、やれ。兎かく長屋に事なかれだ。

(助八と雲哲は土間から駕籠を持ち出してくる。)

彦三郎 いえ、それではあんまり恐れ入ります。

六郎 なに、遠慮はないから乗つておいでなさい。

(六郎兵衛は彦三郎の手を取りて駕籠にのせる。助八と雲哲は身支度をする。おかんは奥に入る。上のかたより猿まはし與助がうろく出づ。)

與助 大屋さん。井戸がへは何うしますね。

六郎 急に大事の用が出来て、おれは御番所ごばんしょへ出なければならぬから、井戸がへの方はまあ宜しく遣つてくれ。おゝ、さうだ。おまへにも用がある。願哲は権三の繩取りをして、おまへは助十の繩を取つて行け。

與助 (おどろいて。) え、どこへまゐります。

六郎 南の御奉行所へ行くのだ。

與助 え。(ふるへる。)

六郎 なにも怖がることはない。おれと一緒に附いて行くのだから安心しろ。

與助 はい、はい。

六郎 併し猿を背負つてゐては少し困るな。だれかに預けて行け。

與助 いえ、この猿めはとて迎もわたくしの傍を離れませんか、一緒に連れて行かして下さい。

六郎 では、まあ勝手にするがいゝや。(一同に。) さあ、めいめいの役割がきまつたら、

日の暮れないうちに出かけようぜ。

(願哲は權三の繩を取り、與助は助十の繩を取りて引立てる。助八と雲哲は駕籠を昇き上げようとして、雲哲はよろける。)

助八 おい、おい、しつかりしろよ。

雲哲 おれは素人だ。仕方がない。

(奥よりおかんは新しい手拭と半紙を持ちて出づ。)

おかん まあ、待つてください。(權三のふところに手拭と紙を入れる。) おまへさん、達者で歸つて來て下さいよ。

權三 えゝ、縁喜でもねえ、泣くな、泣くな。すぐに歸つて來るよ。

助八 (それを見て。) あ、おれも忘れた。待つてくれ。待つてくれ。(わが家の奥へかけ込む。)

六郎 (氣がついて。) あ、おれも忘れた。これ、雲哲。このまゝで御番所へは出られない。家へ行つておれの羽織を取つて來てくれ。

雲哲 大屋さんは相變らず人使ひが暴いな。

六郎 生意氣なことをいふな。この願人坊主め、早く行つて來い。

雲哲 あい、あい。（上のかたに去る。）

おかん （權三に。）おまへさんも着物を着かへて行つちやあどうだえ。

權三 繩をほどいて又縛られるのは面倒だ。これでいゝ、これでいゝ。どうでお花見に行くんぢやねえ。

（家の奥より助八は緡さしの錢を持ちて出づ。）

助八 地獄の沙汰も金次第といふが、身しんしやう上うふるつても二百の錢しかねえ。これでも何かの役に立つかも知れねえから、持つて行くがいゝぜ。（助十のふところに押込む。）

助十 唯つた二百ばかりがどうなるものか。見つともねえから止よせ、止よせ。第一それをおれに呉れてしまふと、あしたの米を買ふ錢があるめえ。

助八 なに、おれは一日ぐらゐ食はずと生きてゐられらあ。まあ、まあ、持つて行く方がいいよ。

おかん ほんたうに心細くつてならないねえ。（權三に。）おまへさんにも幾らか持たして上げたいんだけど……。ちよいとお待ちよ。表の質屋へ行つて來るからさ。

權三 そんなことをしてゐると遅くなる。すぐに歸つて來るんだから、錢なんぞは要らね

え、要らねえ。

(上のかたより雲哲は夏羽織を持ちて出づ。)

六郎 御苦勞、御苦勞。(羽織をきる。) さつきも云ふ通り、おれもこの年になるが、かういふ事は初めてだ。當年六十歳の初陣うひぢんで、なんだか武者震むしやぶるひがして來たようだ。

權三 大將の大屋さんが顫ふるへ出しちやあ困るぜ。

助十 どうぞしつかりお頼み申しますよ。

六郎 なに、大丈夫。さあ、威勢よく出陣だ。

彦三郎 皆さん、おねがひ申します。

權三 さあ、繰くり出せ。

助十 くり出せ。

(六郎兵衛は先に立ち、助八と雲哲は彦三郎をのせたる駕籠をかきあげると、雲哲は又よろける。助八も一緒によろける。權三と助十は願哲と與助に繩を取られてゆく。

おかんは不安らしく見送る。石町こくちやうの夕七つの鐘きこゆ。)

—幕—

第二幕

前の場とおなじ道具。権三と助十の家。第一幕より一月ほど後の朝。

（権三の家では、権三とおかんが酒の膳を前にして、夫婦喧嘩をしてゐる。）

権三 （片肌ぬいで。） やい、やい、この阿魔あま。叩つ殺すからさう思へ。

おかん さあ、殺せるなら殺して御覽。いくら自分の女房でも、横町の黒や斑ぶちを殺したのとは譯が違ふからね。おまへさんも勘太郎の二代目になりたいのかえ。

権三 なに、勘太郎の二代目だ。おれがいつ人殺しをした。

おかん 現在あたしをぶち殺さうとしてゐるぢやあないか。勘太郎は赤の他人を殺したんだが、おまへは自分の連れ添ふ女房を殺さうといふのだから、なほく罪が深いよ。

権三 べらぼうめ。手前なんぞは横町の黒や斑と大した違ちがえがあるものか。黒や斑はおれの顔をみると、尻しつ尾ぼをふつて來るだけでも可愛らしいや。

おかん 尻つ尾をふつて來るところか、あたしなんぞはこんな家へ來て、女房の役からおさん鬘さんどんの役まで勤めてゐるんぢやあないか。それでも可愛くないのかよ。一體おまへだの、隣の助十だのといふ奴を唯置くといふ法があるものか。このあひだの時に牢屋へで

も投^{はぶ}り込んでしまへばいゝものを、町内預けにして無事に歸してよこしたお奉行様の氣が知れないねえ。

權三 あのとくに手前は一粒十六文といひさうな涙をこぼして、おいゝ泣きやあがつたのを忘れたか。おれが町内あづけになつて、無事に歸^{けえ}つて來た顔を見ると、手前は又むやみに喜んで、子供のやうに手放して泣きやあがつた。さうして、大岡様はありがたいと手をあはせて拜んだぢやあねえか。今になつてお奉行様の氣が知れねえもねえものだ。手前勝手も好加減にしろ。

おかん そのときは其時さ。けふのやうに亭主風を吹かせて勝手氣儘のことを云はれちやあ、あたしだつて蟲が承知しないだらうぢやないか。

權三 亭主が酒を買つて來いといふのが、なんで勝手氣儘だ。どんな裏^{うら}店でも一軒のあるじが、酒ぐらゐ飲むのは當りめえだぞ。

おかん 一軒のあるじなら主人^{あるじ}らしく、酒を買ふ錢を五十でも百でも、耳を揃へてならべてお見せよ。

權三 その錢がねえから手前に頼むのぢやねえか。判らねえ外道^{げだう}だな。

おかん 外道でも般^{はん}若^{にや}でも、質草はもう何にもないよ。

権三 それだから大屋さんへ行つて頼めといふのだ。

おかん 家賃を小半年こはんとしも溜めてゐる上に、そんな蟲のいゝことが云つて行かれるものか

ね。まして此の矢先ぢやあないか。

権三 この矢先だから頼みに行けといふのだ。ふだんの時とは譚が違はあ。

おかん そんならお前が自分で行つておいでな。

権三 おれが行かれねえから、手前に頼むのだ。さういふことは女の役だ。

おかん 金を借りに行くのは女の役だ……。 (あざ笑ふ。) 権現様ごんげんさまがそんなことをお決

めなすつたのかえ。

権三 あゝ云へば斯ういふと、手前のやうに亭主を見くびつてゐる女も世界に少ねえものだ。

おかん おまへのやうに女房をいぢめる亭主も世界にたんとあるまいよ。

権三 うぬ、もうどうしても助けちやあ置かねえぞ、念佛でも題目でも勝手に唱へてゐろ。

(権三は土間に飛び降りて、駕籠の息杖いきづゑを持ち來れば、おかんは搔かいくゞりて駕籠のかげに隠れるを、権三は杖をふりあげて追ひまはす。上のかたより猿まはし與助は商賣に出る姿にて、猿を背負ひて出で、この體ていをみて割つて入る。)

與助 又いつもの夫婦喧嘩か。まあ、まあ、靜かにしなさい。

權三 こん畜生があんまり不貞腐ふてくさるから、ぶち殺してしまはうと思ふのさ。

おかん まあ、聽いて下さいよ。毎日商賣にも出られないで、米櫃こめびつががた付いてゐる最中に、朝から酒を買へ何のと勝手な熱ばかり吹くから、あたしが少し口答へすると、すぐに生かすの殺すのといふ騒さわぎさ。愛想が盡きるぢやありませんか。

與助 どつちの鼻ひい屑せきをするでもないが、どうもそれは御亭主の方がよくないやうだな。

權三 なぜ悪いんだよ。

與助 なぜと云つて、おまへは町内あづけの身の上ではないか。それが朝から酒を飲んで、女房を生かすの殺すのと騒さわぎ立てて、そんなことがお上の耳に這入つたらどうするのだ。今度の一件の落らく着ちやくするまでは、せい／＼謹ちん慎しんしてゐなければなるまいではないか。おかん それをあたしが云つて聞かせても、馬の耳に念佛なんですよ。

權三 うるせえ。引込んでゐる。(すこし眞面目になつて。)なるほど、おめえの云ふ通り、こんなことが聞いたら好くねえだらうね。

與助 それはよくないに決まつてゐる。それだから、まあおとなしくしてゐなさいと云ふのだ。

權三 むゝ。(いよくしよ悄げて。) どうも詰らねえことになつてしまつたな。

(この時、隣の助十の家でも怒鳴る聲がきこえる。)

助十 この野郎、どうしても唯は置かねえぞ。

助八 喧嘩なら廣いところへ出て來い。

(臺所の被れ障子を蹴放して、助八は播粉木すりこぎを持ちて跳り出づ。つゞいて助十は出刃庖丁うちやうを持ちて出づ。)

おかん あら、隣でも大變だよ。

與助 あつちは刃物を持つてゐる。これはあぶない。

(與助は猿を縁におろして、怖々こはながら留めようとしてゐると、上のかたより願人坊主の雲哲と願哲は商賣に出る姿にて、住吉踊の傘をかつぎて出で、これを見て騒ぐ。)

雲哲 やあ、やあ、又はじめたのか。

願哲 刃物をふりまはしては劍難けんなんだ。

(助十と助八は捨臺詞すてぜりふにて闘つてゐる。雲哲と願哲は思案して、權三の家の土間から駕籠を持ち出し、與助も手傳ひて、よき隙を見て助十と助八のあひだに突き出し、

その駕籠を枷かせにして二人を隔てる。(

助十 え、邪魔なものを持出しやあがるな。

助八 早く退どけろ、退けてくれ。

雲哲 まあ、待った、待った。

願哲 あぶない、あぶない。

與助 兄弟喧嘩もいゝ加減にしなさい。

權三 さう／＼しい奴等だな。(縁先に出る。)おい、助十。もう止せよ。おれたちは

町内あづけの身の上だから、むやみに騒ぎ立てるとお咎めを受けるのを知らねえか。

助十 そりやおれも知つてゐるが、あの野郎があんまり癩かさに障さるからよ。

おかん (表に出る。)朝つぱらから喧嘩なんぞをして見つともないぢやないが。一體ど

うしたの。

助十 町内あづけの身の上で、うつかりと出あるくわけにも行かず、よんどころなしに小

さくなつてゐると、あの野郎め、その思ひやりも無しに毎晩遊び歩いてゐるやあがつて、

ゆうべもたうとう歸けえらねえ。仕方がねえから、今朝もおれが水を汲む、飯を炊くといふ

始末だ。そこへぼんやり歸つて來やあがつて、碌に挨拶もしねえでおれの炊いた飯を平

氣で搔つ食つてゐやあがる。あんまり人を馬鹿にしてゐやあがるから、おれが一番きめ付けてやると、逆ねぢに食つてかゝつて來やあがる。野郎め、ゆうべは何處かで振られて來やあがつて、その八つ中りを兄貴に持つて來るなんて、途方も途徹もねえ奴だ。おれが腹を立つのも無理はあるめえ。

助八 一年に一度や二度ぐらゐ兄貴に飯を炊かせたつて罰のあたるほどのこともあるめえ。第一その米はだれが買ったんだよ。

助十 おれはお預けの身の上だ。

助八 おあづけを好い幸ひにして、弟にばかり働かせることがあるものか。せめて小遣ひ取りに草鞋でも緇へといふのに、それもしねえで毎日毎晩ごろ／＼してゐやあがる。一體、家の兄貴だの、隣の權三だのといふ野郎どもを、無事に歸してよこすといふ、お奉行様の氣が知れねえ。このあひだから牢屋へぶち込んで置けばいゝのだ。

權三 こいつも鼻と同じやうなことを云やあがる。手前の兄貴はどうだか知らねえが、この權三は牢に入れられるやうな悪いことはしねえのだ。うそだと思ふなら、大岡様のところへ行つて聽いてみる。

助八 えゝ、わざ／＼聽きに行くまでもねえ。どうで所拂ひか追放にでもなる奴等だ

から、お慈悲で當分歸してくれたのだ。手前達は知らねえのか、左官屋の勘太郎はきのふの夕方、無事に歸されて來たぞ。

助十 (おどろく。) え、ほんたうか。

(権三もびつくりして出て來る。)

権三 おい、おい。ほんたうか、本當か。

おかん 本當に勘太郎は歸されたのかえ。

助十 そりやあ些ちつとも知らなかつた。(又かんがへて。) やい、手前。おれ達をかつぐのぢやあねえか。

助八 (すました顔で。) まあ、かれこれ云ふことはねえ。論より證據だ。豊島町へ行つて勘太郎の家を覗いてみる。今ごろは鼻唄で祝ひ酒でも飲んであらあ。

権三 こりやあ驚いたな。どうしたのだらう。

おかん やつぱり人違ひだつたのかねえ。

雲哲 なるほどさう云へば、お奉行所からの差紙さしがみで、大屋さんと彦三郎さんは今朝早くから數寄屋橋へ出て行つたさうだ。

助十 ふむう。(権三と顔を見あはせる。)

與助 大屋さんの話では、左官の勘太郎といふ奴は不斷から身持のよくない男で、本職の
 鋤こてよりも賽さいころを持つ方を商賣しょうばいにしてゐる。さうして、丁度去年の暮頃から博奕ばくちに勝つ
 たと云つて、急に身なりを拵こしらへたり、酒を飲んだり、女を買つたりして遊びあるいてい
 る。いや、まだそればかりでなく、馬喰町の女隠居の殺された晩にも、あいつは夜が更
 けてから歸つて來て、木戸を叩いて竊そつと入れて貰つたといふことだ。

おかん そのほかにも色々怪しいことがあるから、どうしても勘太郎の仕業に相違ない。

今度の一件も十に九つはこつちの物だと、大屋さんも大變よろこんでゐなすつたのだが、
 どういふわけでそれが急に引つくり返つてしまつたのかねえ。

願哲 流石さすがの大屋さんも今朝はよつほど苦勞ありさうな顔をして出て行つたといふから、
 どうもむづかしいのかも知れないな。

與助 八さんのいふ通り、勘太郎がゆうべ歸されて來たのが論より證據だ。

おかん 困つたことになつたねえ。(權三に。)おまへさん。どうするえ。

權三 どうすると云つて……。おれも面喰めんくらつてしまつた。おい、助十。どうも困つたな。
 助十 まつたく困つたな。だからおれが止せといふのに、手前がつまらねえ娑婆しやばツ氣きを出
 して、云はずとも好いことをべら／＼しやべつたもんだから、到頭こんなことになつて

しまつたのだ。

権三 それだからおれも唯、勘太郎らしいと曖昧あいまいに云つて置かうと思つたのを、大屋さんが何でも勘太郎に相違ちがひございませんと、はつきり云つてしまへと指圖するもんだから、おれもつい其氣になつたのだ。手前だつて御白洲おしろすで、確かに左様でございませと云つたぢやねえか。

助十 そりやあお奉行様が確かに左様かと念を押すから、おれの方でもついつかりと、ハイ左様でございませと云つてしまつたのよ。おれが好んで云つたわけぢやあねえ。

権三 好んで云つても云はねえでも、御白洲で一旦云つてしまつた以上は、もう取返しは付かねえ。どうしたら好からうな。

助十 さあ、どうしたらよからう。おい、八。なんとか工夫はあるめえかな。

助八 それ見ねえ。めいゝのからだに火が付いてゐるのだ。兄弟喧嘩けんかなんぞしてゐるやうな場合ぢやねえぢやあねえか。

おかん ほんたうに夫婦喧嘩けんかどころの騒ぎぢやあないよ。

権三 所ところ拂はらひぐらゐで濟むだらうか。(かんがへる。)もしお呼び出しになつて、今度こそは入牢申付くるなぞと來た日にやあ助からねえぜ。

與助 あの彦三郎といふ人は年も若し、親孝行の一心から出たことだから、上のお慈悲もあるだらうが、おまへ達はどうかなあ。

助十 このあひだは牢へぶち込まれようが何うしようが構はねえといふ料簡だったが、さて斯うなつてみると、どうも牢なんぞへは行きたくねえ。やつぱりあの時に止せばよかつたのだ。やい、權三。おれは一生手前を恨むぞ。

權三 そんなことを云つてくれるなよ。かうなりやあお互えにいちれんたくしやう一蓮托生ぢやあねえか。なにしろ何うも弱つたな。

おかん (權三の袖をひく。) おまへさん。いつそ今のうちに姿を隠しちやあどうだえ。

權三 おれが逃げたら、あとの者に難儀がかゝるだらう。今度はおめえが町内預けにでもなるかも知れねえぜ。

おかん (涙ぐむ。) そりやあ亭主の爲だもの、仕方がないやね。

助八 ぢやあ、兄い。おめえも逃げることにするか。逃げるなら、大屋さん達の歸らねえうちの方がいゝぜ。

雲哲 だが、二人を逃がしてしまつたら、家の者ばかりでなく、大屋さんや月番の行事は勿論、まかり間違へば相長屋一同が迷惑することになるだらう。

願哲 さうだ、さうだ。皆ながどんな迷惑を被ることになるかも知れないから、駈落なんぞは止して貰ひたいな。

與助 それもうまく逃げ負せればいゝが、途中で捉まつたが最後、罪はいよゝゝ重くなるばかりだ。

助十 それもさうだな。ぢやあ、まあ大屋さんの歸るまで、おとなしく待つとしようか。

助八 大屋さんが歸つて來たら、もう間にあふめえぜ。

與助 いや、駈落はよくないよ。

おかん それぢやあ何うすればいゝのさ。

與助 それはわたしにも判らないが、なにしろ困つた事が出來たものだ。

助十 おれたちはあの彦三郎の尻押しをして、大屋の家へあばれ込んだと云ふことになつてゐるんだからな。

權三 おまけにその勘太郎が人違ひと來た日にやあ、どう考へても無事ぢやあ濟むめえ。

助十 こりやあやつぱり駈落だ。

與助 いけない、いけない。

(與助と雲哲、願哲は助十を支へてゐる。下のかたの路地口より左官屋勘太郎、三十

二三歳、身綺麗にいでたち、角樽つのだると鯛すめをさげて出づ。(

雲哲 あ、勘太郎が来た。

與助 なに、勘太郎が来た。

願哲 ほんたうに来た、来た。

(人々は顔をみあはせ、權三と助十は思はずあとへ退る。勘太郎は何氣なく一同に挨拶する。)

勘太郎 みなさん、急にお涼しくなりました。

與助 (なんだか氣の毒さうに。) 朝晩はめつきりと涼すげ風かぜが立つて來ました。

勘太郎 御近所に居りながら、つい〜御無沙汰ばかり致して居ります。

與助 はい、はい。おたがひ様で……。

(人々は勘太郎のこゝろを測はかりかねて、不安らしく眺めてゐる。)

勘太郎 駕籠屋の權三さんと助十さんの家はここでございますね。

おかん (もぢ〜しながら。) はい、はい。

助八 (度胸を据ゑて進み出づ。) そつちが權三、こつちが助十の家ですが、なんぞ御用ですかえ。

勘太郎　とき／＼錢湯でお目にかゝつてゐながら、ついお見それ申しました。お前さんは助さんの弟さんでしたね。わたしは豊島町の勘太郎ですよ。（云ひながら権三と助十に眼をつける。）おゝ、権さんも助さんもそこにあるのか。

（権三と助十はだまつて俯向うつむいてゐる。）

勘太郎　早速ですが、わたしも飛んだ災難で、小一月も傳馬町でんまぢやうの暗いところへ送られてゐましたが、流石は太岡越前守様のお捌きで、白い黒いはすぐに判りまして、きのふ夕方、無事に下げられて來ました。

おかん　（やはりもぢくししながら。）それはまあお目出たうございました。

勘太郎　今度のことに就きましては、権さんと助さんには色々御心配をかけたやうに聞いて居りますので、これはほんのお禮のおしるし、甚だ失禮ではございますが、どうぞお納めをねがひます。

おかん　はい。（とは云ひながら手を出しかねてゐる。）

勘太郎　（助八に。）では、八さん。どうぞこれを……。

助八　（同じく變な顔をして。）え、どうしてこんな物を呉くんなさるのだね。

勘太郎　今も申す通り、わたしも明るい體になつて世間へ出て來ましたから、近所隣へも

心ばかりの配り物をいたしました。そのついでと申しては何ですが、これを権さんと助さんへもお禮心に差上げたいと存じまして……。

助八 ひどく切口上で、をかしいぢやあねえか。なんで禮をくれるのだ。(勘太郎の顔をながめてゐる。)

與助 おゝ、角樽に鯛……。いや、なか／＼行き届いたものだな。

(與助は猿を背負ひ、近寄つて覗く時、その背中にゐる猿は不意に手をのばして鯛を引つたくる。)

與助 (おどろいて。) えゝ、飛んでもないことをするな。(鯛を取返して、猿のあたまを打つ。) さあ、さあ、お詫をしろ。お詫をしろ。

(與助は背中より猿をおろし、その頭をおさへてお辭儀をさせようとすれば、猿はその手を拂ひ退け、齒をむき出して勘太郎に飛びかゝる。不意におどろきたる勘太郎はたちまち殘忍の相をあらはし、兩手に猿の喉を強くおさへて絞め殺し、その死骸を投げ出す。人々は呆氣あつけに取られたやうに眺めてゐると、與助は猿の死骸をかゝへて泣き出す。)

與助 おゝ、猿めが死んだ、死んだ。

雲哲 死んだ、死んだ。

おかん まあ、可哀さうだねえ。

勘太郎 いや、これはわたしが悪かつた。猿は死にましたか。

與助（泣く。）死にました、死にました。

（勘太郎は紙入から金三枚を取出し、紙にのせて出す。）

勘太郎 なにしる猿めが無暗に飛びついて來るので、わたしも夢中になつて飛んだことをしてしまいました。お前さんの商賣道具をなくなした償つぐなひと、云つては少いかも知れな
いが、これでまあ堪忍してください。

（與助はだまつて泣いてゐる。）

雲哲 （與助のそばに寄る。）商賣道具の猿を殺されては、おまへも定めて困るだらうが、

三兩といふ金があれば又どうにかなる。

願哲 これも災難とあきらめて、我慢しなさい。我慢しなさい。

與助 幾年も馴染んだ此の猿を金にかへられるものか。（又泣く。）

雲哲 さう云つても今更仕様がない。（勘太郎の手より金を受取る。）さあ、これで代り
の猿を買へばいゝのだ。

(雲哲と願哲は與助に金をわたし、なだめながら助十の家の縁の方へ連れてゆく。與助は猿をかゝへて泣いてゐる。)

勘太郎 わたしはなぜこんな手暴てあらいことをしたか。くれ／＼も堪忍して下さい。あゝ、これで肴さかなも臺無しになつてしまつた。まあ、酒だけでも納めて貰ひませう。

(勘太郎は落ちてゐる鰯を足にて蹴飛ばす。このあひだに權三と助十は眼で知らせ合ひ、形をあらためて勘太郎のまへに出る。)

權三 もし、勘さん。どうも何とも申譯がありません。この長屋にゐた彦兵衛のせがれが大坂からわざ／＼下つて來て、おやぢの無實を訴へると云つて泣いて騒ぐ。大屋さんも氣の毒がつて色々世話を焼いてやる。それに釣り込まれてわつし等もついうつかりと詰まらねえことを饒舌しやべつたもんだから、今さら抜きさしもならねえやうな羽目になつてしまつて、たうとうお奉行所まで引張り出されるやうなことになつてね。

勘太郎 (冷かに。) いや、それは大抵知つてゐますよ。その節は色々御心配をかけました。

助十 まあ、さう云はねえで、一通りは聽いておくんなせえ。何もわつし等だつて確かに見とどけたと云ふわけぢや無し、ほんの夜目遠目でちらりと見ただけのことだから、正

直にその通り云ふ筈だったのが、御白洲へ出て曖昧な事を云つちやあならねえ、何でもはつきりと物をいへと大屋さんが云ふもんだから、物の間違ひが自然と大きくなつて、お前さんにも飛んだ御迷惑をかけてしまひました。今となつちやあ、わつし等もまつたく後悔してゐるんですから、どうかまあ料簡しておくんなせえ。

おかん　ほかの事とは譯が違つて、まつたく料簡の爲しにくいことでせうが、わたくし共が打揃つて幾重にもお詫をいたしますから、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。

勘太郎　（しづかに。）さうめいいに御挨拶にやあ及びません。腹を立ててゐるくらゐなら、こんな物を持つてわざくお禮に來やあしませんよ。（やゝ皮肉らしく。）つまりはわたしの身み状じょうが悪いからで……。左官屋の勘太郎は泥坊でもしさうな奴だ、人殺しでもしさうな奴だと、不斷からおまへさん達に睨まれてゐるので、自然こんなことになつたのですよ。

権三　いや、さう云はれると、いよく穴へでも這入りたくなるが、そこをまあ勘辨しておくんなせえ。

助十　これに懲こりてこの後は、決して他人ひと様の噂うわなんぞはしませんから、今度のところだけは何分勘辨して……。

勘太郎 まあ、同じことを幾度も云はないでもいゝ。なにしろ私はお禮に來たのだから、素直にこれを納めてください。わたしの持つて來た酒だからと云つて、まさかに毒が這入つてゐるわけでもないから。

助八（むつとして。）おい、勘太郎さん。飛んだ人違ひをしてお前さんに迷惑をかけたのは重々こつちが悪い。それだから權三も、兄貴も、この通り平あやまりに謝まつてゐるぢやあねえか。それにおめえは男らしくもねえ。堪忍するなら堪忍する、堪忍しねえなら堪忍しねえと、なぜ綺麗さつぱりと云つてくれねえのだ。柄にもねえ切口上で、意地の悪い御殿女中のやうに、うはべは美しく云ひまはしながら、腹には刺とげを持つてゐるのが面白くねえ。第一、お禮に來たとはなんの事だ。こつちはお前にあやまりこそすれ、おめえに禮を云はれる覺えはねえのだ。

勘太郎（あざ笑ふ。）それはおまへさんの僻ひがみといふものだ。お禮と云つたのが氣に入らなければ、わたしが無事に娑婆へ出て來た身祝ひだと思つてください。

助八 いけねえ、いけねえ。おれの持つて來た酒だからと云つて、まさかに毒が這入つてゐるわけでもねえなぞと、忌いやなことを云ふぢやあねえか。酒の毒よりもおめえの口に毒がある。それを黙つて聽いてゐられるものか。折角のおこゝろざしだが、兄きに代つて

おれが斷るから、こんなものは持つて歸つて貰ひてえ。

勘太郎 それでは喧嘩だ。もう少し穩かに口をきいて貰ひたいな。

(權三の家の縁の下から一匹の犬が出て來て、勘太郎をみて凄まじく吠えながら飛びかゝらうとする。勘太郎は再び兇暴の相をあらはして屹と睨む。犬はますゝ吠える。)

雲哲 又のら大が出て來やあがつたか。

願哲 貴様も殺されるな。叱つ、叱つ。

(ふたりに逐はれて犬は上のかたへ逃げ去る。)

おかん (云譯らしく。) あの野良犬にやあ困るねえ、だれを見てもすぐ吠えるんだから。

權三 犬だつて可愛くねえ奴にやあ吠えるのだらう。よく考へてみると、成程こりやあ八の云ふ通りで、折角のおこゝろざしは有難てえが、どうもおまへさんからこんな物を貰ひたくねえ。お禮にしてもお祝ひにしても、これは持つて歸つて貰はう。おい、助。さつきから無暗にあやまつて、損をしたやうだぜ。

助十 おれもさう思つてゐるのだ。(勘太郎に。) まつたくおめえの云ひ草は御殿女中で、忌にチク／＼當るやうだ。堪忍しねえなら堪忍しねえ、恨みを云ひに來たなら恨みを云

ひに來たとはつきり云つてくれ。面當てらしく酒や肴を持つて來て、眞綿に針で人をいぢめようとするのは、江戸つ子らしくねえ仕方だ。

勘太郎 なるほどお前さん達は江戸つ子だ。(又あざ笑ふ。) かみがたもの上方者の尻押しをして、

江戸つ子にぬれ衣(ぬい)をきせるなぞとは、本當の江戸つ子でなければ出來ない藝だよ。

助十 やかましいやい。手前のやうな江戸つ子があるから、本當の江戸つ子の面(つら)が汚れるのだ。こんなものは持つて歸れ。(角樽を投げ出す。)

勘太郎 おまへさん達はあやまつてゐるのか、喧嘩を賣るのか。

權三 もう斯うなりやあ喧嘩だ、喧嘩だ。

おかん まあ、お前、お待ちよ。

權三 え、牢へ入れられようが、首が飛ばうが構はねえ。こんな野郎は半殺しにして遣(や)らなけりやあ氣が濟まねえのだ。

おかん また喧嘩を始めちやあいけない。お止(よ)しよ。止しておくれよ。

(おかんは頻りに權三を支へる。)

勘太郎 近いうちにお咎めがあると思つて、みんな自棄になつてゐるのか。そんな病犬(やまいぬ)の相手になつて、折角明るくなつた體をもう一度暗いところへ遣られては堪らない。は

ゝゝゝゝ。

(勘太郎は笑ひながら下のかたへ行きかゝると、助十は無言で飛びかゝつて、勘太郎の横面をなぐる。)

勘太郎 えゝ、なにをしやあがるのだ。氣ちがひめ。

(勘太郎は又もや人相を一變して、左右を睨む。)

勘太郎 おとなしくしてゐりやあ増長しやあがつて、好加減にしろ。豊島町の勘太郎を知らねえか。この大^{あに}哥さんと喧嘩をするなら、からだの骨から鍛へて來い。

助八 こつちは生きてゐる人間だ。猿の喉を絞めるのとは譯が違ふぞ。

(助八は勘太郎にむしや振り付けば、勘太郎は突き退ける。助十は又むしやぶり付く。権三も留められるのを振切つて飛びかゝる。三人は遂に勘太郎をねぢ倒して袋叩きにする。)

権三 おい、與助。こいつはおめえの猿のかたきだ。みんなと一緒になぐれ、なぐれ。

雲哲 なるほど猿のかたき討か。

願哲 これも長屋の附合だ。

(與助は竹の鞭を把り、雲哲等も一緒に勘太郎をなぐる。)

勘太郎 さあ、どいつも皆んな下手人だぞ。殺すなら殺せ。立派に殺してくれ。

権三 こいつを歸すと面倒だ。ふん縛つてしまへ。

助十 八。このあひだの繩を持つて來い。

(助八は奥へかけ込んで麻繩を持つて來る。)

おかん 縛つてもいゝのかえ。

助八 よくつても悪くつても構ふものか。毒食はば皿までだ。

権三 さあ、早く縛れ、縛れ。

(助八は勘太郎を縛る。)

雲哲 どうも仕置しおきが暴くなつて來た。縛つてしまふのはちつとひどいな。

願哲 うか／＼してゐて、こつちまでが係り合ひになつてはならない。長屋の附合も先づ

このくらゐにして置かうか。

雲哲 これから先、何事が起つても、おれたちは知らないぞ、知らないぞ。

(雲哲、願哲は下のかたへ逃げ去る。)

與助 かたき討が濟んだら、わたしもこゝらにゐない方がよきさうだ。

(與助も猿をかゝへて、おなじく路地の外へ逃げてゆきかけしが、又引返して來る。)

與助 これ、お役人が来たやうだぞ。

權三 なに、お役人が来た。

助十 そいつはいけねえ。どうしよう。

助八 どうしよう。

(三人はうろたへながら四邊あたりを見まはし、助十は駕籠に眼をつける。)

助十 これだ、これだ。

權三 ちげえねえ、早くしろ、早くしろ。

(三人は繩からげの勘太郎を引摺つて駕籠のなかへ押込み、外から垂簾たれをおろす。おかんは不安らしく表をのぞいてみると、路地の口より石子伴作は捕方とりかたの者ふたりを

連れ、雲哲と願哲を先に立てて出づ。)

伴作 左官の勘太郎は確かにこの裏にまるつてゐるな。

雲哲 長屋の者と喧嘩をして居ります。

伴作 喧嘩をいたしてゐるか。

(伴作はつかくと進み来る。權三夫婦、助十兄弟は薄氣味悪さうにあとへ退る。)

伴作 豊島町の左官屋勘太郎はいづれへまるつた。

四人 え。(顔をみあはせる。)

伴作 こゝにまるつてゐる筈ではないか。

権三 (曖昧に。) いえ、そんな者は……。

伴作 (雲哲等を見かへる) たしかに来てゐると申したな。

雲哲 はい。その勘太郎は……。

助十 (あわてて眼で制す。) その勘太郎は……。もう歸りましてございます。

伴作 (うたがふやうに。) 歸つたか。

願哲 でも、たつた今までこゝにゐた筈だが……。

権三 なに、歸つたよ、歸つたよ。この通り、どこにもゐねえちやあねえが。

(雲哲と願哲は不審さうにそこらを見まはしてゐると、駕籠のなかにて勘太郎が叫ぶ
)。

勘太郎 もし、お役人さま。勘太郎はこれに居ります。

(権三、助十等はぎよつとする。)

伴作 (捕方を見かへる。) それ。

(捕方は駕籠の垂簾をあけて、勘太郎をひき出す。)

伴作 この者にはだれが繩をかけた。

(権三等はだまつてゐる。)

伴作 御用によつて勘太郎を召捕りにまゐつたところ、先廻りをして誰が繩をかけた。

権三 では、勘太郎はお召捕りになるのでございますか。

伴作 昨日一旦ゆるして歸されたは、深い思おぼしめ召しのあることで、かれの罪状いよく明

白と相成つて、再びお召捕りに相成るのだ。

助十 いや、さうでございましたが。(安心して。)實はわたくしが縛りました。

権三 わたくしも縛りました。

助八 わたくしも手傳ひました。

伴作 おゝ、さうであつたか。委細はあらためて申し聞かせる。(捕方に。)それ、引立

てい。

勘太郎 おかまひないと申渡されたわたくしが、どうして二度のお繩を頂戴いたすのでご

ざいませうか。

伴作 兎とやかう申すな。尋常に立て、立て。

勘太郎 (強情に。)いえ、恐れながら申上げます。

捕方 えゝ、立て、立て。

(伴作は先に立ち、捕方は無理に勘太郎を引立てて下のかたに去る。一同は呆氣あつけに取られたやうにあとを見送る。)

権三 なんだか狐に化かされたやうだな。

與助 やつぱり勘太郎はお召捕りになるのか。それといふのも、おれの大事の猿を殺した報むくいかも知れないぞ。

おかん いくら猿だつて無暗にひねり殺すやうな奴だもの、人間だつて殺し兼ねやあしな
いよ。

雲哲 さうだらうなあ、むやみにあいつに繩をかけて、どうなることかと心配してゐたが、
これが過あやまちの功名と云ふのかな。

願哲 かうなるとおまへ達はお叱りどころか、却つてお褒めにあづかるかも知れないぞ。

おかん お褒めにあづからないまでも、お叱りがなければ結構さ。お役人が來たと聞いた
時には、わたしは本當にぞつとしたよ。

(路地の口より家主六郎兵衛と彦三郎出づ。)

おかん あら、大屋さんが歸つて來なすつた。

六郎 おゝ、みんなこゝにゐるか。まあ、まあ、めでたい、目出たい。わたしもこれで重荷をおろした。

彦三郎 みなさんのお蔭様で、わたくしの本望もやうやく達しまして、こんな嬉しいことはござりません。

権三 本望が達したかえ。いや、それで判つた。今こゝへお役人が来て、勘太郎を召捕つて行きましたよ。

彦三郎 では、勘太郎はもう召捕られましたか。

助十 (自慢らしく) おれ達がふん縛つてお役人に引渡して遣つたよ。

六郎 いや、それは早手廻しであつたな。

助八 それにしても、どうでもお召捕りになる勘太郎をなせ一旦ゆるして歸したんだね。

六郎 そこが大岡様のえらい所だ。いくら権三と助十が證人に出てくなくても、その晩に見た奴は左官の勘太郎に相違ございませんと云ふばかりでは、ほかには確かな證據がない。勘太郎は飽までもシラを切つて白状しない。さすがのお奉行様も吟味の仕様がなないので、先づおかまひないと云ふことで勘太郎めを一旦下げて置いて、實はちやんと隠し目附めつけをつけてあつたのだ。ねえ、彦三郎さん。まつたく大岡様はえらいではないか。

彦三郎 實に恐れ入りましてござります。今もお家主様がおつしやる通り、一旦は勘太郎を無事に下げて、そつと隠し目附をつけて置かれますと、身におぼえのある勘太郎は、自分の家へ歸るとすぐに天井の板をはがして、そこに隠してあつた血だらけの金財布を取出して、臺所の竈へつゝひの下で焼いてしまつたさうでござります。

六郎 どうで焼くなら早く焼いてしまへばいゝものを、そこがやつぱり運の盡きで、今まで天井裏に隠して置いて、それを竊そつと取出したところを、隠し目附にすつかり睨まれてしまつたので、もう動きが取れない。そこで、今日あらためてお召捕りといふことになつたのだから、彼奴いくら強情を張つても、今度こそは再び娑婆へは出られまいよ。そこで、權三と助十だがな。

二人 はい、はい。

六郎 かうなつた以上は、勿論町内あづけも免されるな。

二人 はい、はい。

六郎 身分の低い者どもにも似合はず、俠氣をとしぎを以て小間物屋彦三郎に助力じよりきいたし、まことの罪人を訴へ出でたる段、近ごろ奇特に存ずるといふので、いづれ改めてお呼び出しの上、お奉行様から直々のお褒めがある筈だぞ。

二人 やあ、ありがてえ、ありがてえ。

助八 ぢやあ、御褒美も出るだらうか。

六郎 慾張つた奴だ。まだそこまでは判るものか。

與助 やれ、やれ、これでわたしも安心したが、かうなると彦兵衛さんはいよく氣の毒だつたな。

おかん 今更うたがひが晴れたところで、どうにも取返しが付かないからねえ。

六郎 いや、そこが又、大岡様のえらい所だ。みんなびつくりするなよ。

(六郎兵衛は彦三郎に指圖すれば、彦三郎はこゝろ得て、路地の外へ出てゆく。)

権三 (かんがへる。) いくら大岡様がえらいと云つても、まさか死んだ者を生かして返^{けえ}しやあしめえ。

助十 死ぬもの貧乏とはよく云つたものだな。

六郎 とところが、生かして歸してくれたよ。

一同 え。

六郎 大岡様は初めから見透しで、どうも彦兵衛さんは本當の罪人らしくない。これは何かの間違ひであらうといふので、^{おもてむき}表^{ひろう}向は牢中病死と披露して、實は生かして置いて

下すつたのだ。

おかん ぢやあ、彦兵衛さんは生きてゐるんですかえ。

六郎 むゝ、むゝ、生きてゐるよ。

權三 彦兵衛さんは生きてゐる……どこまで行つても、狐に化かされてゐるやうだぜ。

助十 なに、化かされてゐることがあるものか。おれにはちやんと判つてゐらあ。なるほど大岡様はえらいものだな。

助八 名奉行とあがめ奉つるも嘘ぢやあねえ。

與助 彦兵衛さんが生き返つてくれりやあ、おれの猿なんぞは死んでもいゝ。

(下のかたより駕籠かき二人が附添ひ、彦三郎は父彦兵衛の手を取りて介抱しながら出づ。)

彦三郎 みなさん。御安心ください。父はこの通りでござります。

六郎 今はまつ晝間びるまだ。幽霊ではないからよく見なさい。

彦兵衛 みなさん有難うございます。

一同 おゝ、彦兵衛さんだ、彦兵衛さんだ。

(一同はよろこんで彦兵衛のまはりに駈けあつまる。)

(大正十五年七月)

——幕——

青空文庫情報

底本：「現代日本文學全集56 小杉天外 小栗風葉 岡本綺堂 眞山青果集」筑摩書房
1957（昭和32）年6月15日発行

入力：林田清明

校正：松永正敏

2003年12月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

権三と助十

岡本綺堂

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>